都市景観大賞「特別賞」受賞記念

杜の都・景観シンポジウム
～片平キャンパスから考える杜の都の景観～

開催記録

【日時】平成２９年１０月２８日（土）１３：００～１６：３０
【会場】東北大学片平キャンパス　さくらホール

都市景観大賞「特別賞」受賞記念

杜の都・景観シンポジウム

～片平キャンパスから考える杜の都の景観～

【日時】平成29年10月28日（土）
13:00～16:30

【会場】東北大学　片平キャンパス
さくらホール

【第２部】基調講演①

「地域の資源を活かした景観づくり」

宮城大学事業構想学群　教授
大館市歴史的風致維持向上協議会委員
舟引　敏明　氏

■都市景観大賞とは何か？

都市景観大賞が始まったのは、今からちょうど25年前、平成3年の時でちょうど我々は、旧建設省、国土交通省でずっと都市計画と公園緑地という仕事をやってきましたので、これを作った段階、その前から都市景観を考えております。講演するにあたって、仙台貰ってないわけないよね、と調べると平成3年、いきなり一番最初に仙台駅周辺地区、人工地盤周辺の一体のところ交通処理をしたあの眺め、今仙台駅の眺めを思い出してください。

それから夢メッセ、泉パークタウン、平成3年はまだバブルの時期でして、かなり人工的に作り上げたものを評価しているような感じがちょっとしますよね。その次に平成5年・6年は、クリスロードとぶらんどーむ商店街が賞をいただいています。これは今まであった商店街をリニューアルして、きれいな形にして、七夕の舞台にもなっているのに対して評価している、そういうことに対しての評価。平成23年に定禅寺通、そして今年片平キャンパス、どちらかというと歴史的な資産をもう1回現代にうまく戻したという活動をしていることを表彰しているというところです。

■良い景観の定義

良い景観とは何なのか。一番定義が難しいのです。最初に法律を作ろうとしましたが、良い景観ってどう定義するんですかというところで議論が頓挫して20～30年かかりました。

アレックス・カーさんという日本にお住まいの文化人がいます。

この方の最近の日本景観論という本の中に日本の景観工学は間違っている、という事が書いてあります。沿道の景観やどこかの町の写真。日本中ほぼどこに行ってもこれとほぼ類似の看板の写真が見て取れます。仙台でも国道4号線をずっと行くとすぐこんな感じですね。それからインターチェンジ

を降りると屋外広告物の乱立。最近では、役には立つんだけども、メガソーラー。某地域では瓦が有名なのですが、その瓦の上にソーラーパネルが載っちゃうと台無しになるという問題を抱えています。こういうのはおかしいんじゃないか、と言っているのが、アレックスさん。ただ良いことだけを申し上げますと、右上の写真、平成22年か23年頃、京都は三条河原町の交差点のところの写真です。ここから上の看板は全部取っ払われました。この5年間、京都市は屋外広告物に対して、徹底的に人海戦術と予算を入れて、みんなこの看板の広告主を説得して周って、下ろさせた。簡単にいうと、やればできるじゃん！というのが我々の率直な感想です。

アレックスさんの本の中でも指摘されていましたけど、北九州市の門司港。私は実はこの辺の生まれなのですが、子供の頃からこんなきれいな洋館が残ってたわけじゃないんです。ボロボロになっていて地元の人も誰も知らないのを20年か30年かけて、コツコツ明治期の洋館を修復して、ここまで整備されました。

今は「るるぶ」でも「マップル」でも門司港レトロ地区と言って観光で誰でも行けるようになってるんですけれども、そのお隣にこの辺に三角っぽい屋根が見えるとしたら、この羽のようにまだ歴史的建物に配慮したというホテルでアルド・ロッシという建築家が設計したものです。そんなところにこれはタワーマンションです。建てないでくれと言いたいですが、「そんなことをやっちゃいけないよね」というのが一番大きな問題意識です。

■景観が抱える問題

ここから少しだけ、学校で面している、難しい問題を少しだけわかりやすく説明します。景観問題って何が問題かといった時に、景観の中で緑って一番わかりやすいので、某区でトラブルになった案件です。トトロの木って、某区の住宅地のど真ん中の小さな森ですけども、やはり相続税って日本ではかなり大きいものがありますから相続が発生すると、お金を払わなきゃいけないから、払う手段として土地を売却します。デベロッパーさんに売却をします。デベロッパーさんというのはその利益を上げるのが商売ですから、宅地購入してできるだけ有効に使えるマンションを作って売ります。そうすると、その周辺の住民の方々、環境が悪くなるからそんなマンションを作るのは嫌だ、とおっしゃいます。これは全国どこでもいろんなとこで起きている当たり前の構図です。しょうがないから行政に何とかしてくれと泣き付いて、この場合は行政がたまたまお金を出して土地を買いましょう、という所まで決断をした。でもお金って行政が持ってるわけじゃないですから、区民のお金で買っているという事。誰1人実は悪いことやってないんです。「経済的合理的活動と行動」と書いてますけども、皆さんがそのポジションに入れば100%やるであろうにもかかわらずこういう問題がなぜ起きるのか、というのが我々景観だとか緑を行政でやっていると我々が抱えなきゃいけない大問題でありました。

■景観の価値を守るための法律

緑って確保するときにあった方が良いけど、あったからといってお金が儲かるかというとあまり儲からない。無くなって困るかというと、無ければ無くたって何とかなる。実はそんなに価値を認識されていないのかもしれない。例えば宅地を売る時に木が1本入っているとですね、その分プラスで良い値段で売れるか、というとそうではなくて、木を切るための費用を差し引いて移すというのが不動産の価値観です。実際はじゃあ切る、となると今まで見えなかった価値が顕在化するという問題がある。これは市場で取引にはなかなか反映されない、というのを経済学で「外部性を有する」といい、市場の価格の中に含まれない。これをどうにかしなければいけないというのが我々の1番難しい課題です。その時にどうやるかというと価値はあるんだ、ということを皆で共有する認識をする、という事。それをきちんと名前をつけて、その価値を守るために費用をみんなで分かち合いましょうね、というのが実は法律というものの仕組みなのです。

じゃあ具体的に名前を付けるというと、例えば国宝。国宝って最初に建造物に書いてあるわけではありません。大崎八幡ですが、そんな名前をつけると、これはみんな100%国の宝だと思ってしまう。これは多賀城ですね。史跡、特別史跡という文化財保護法の中で名前をつける。これは松島。特別名勝。これも文化財。仙台市に貴重な天然記念物があります。青葉山です。国の文化財保護法で大切だというふうに守ります。平成16年に「景観法」という法律がやっと出来上がりました。

では、その時に何が良い景観かというのが1番難しかったのですが、この時は「地域住民の意向を踏まえ、それぞれの地域の個性」要は地域に住んでる人がこれは良い景観だよって言えば、さっきの名前をつけたことにしましょうとなる。それで建築物の色だとか何とかに行政がケチをつける、そういう仕組みを作る。ローカルルールを作る、完全な分権の仕組みになっています。

■各地のローカルルール事例

瀬戸内牛窓というところでは、片方では１つの景観の区域の中で歴史的な街並みを指定すると同時に、別荘地はスパニッシュコロニアル様式の屋根をつけなきゃいけないなど、そのようなルールを作る。ローカルルールは何でもありなんです。1番面白かったのは、歌舞伎町。新宿区の景観計画の中で、エンターティメントランド歌舞伎町地区は「形態意匠は周囲の賑わいを損なわない」地味な建物を作っちゃだめ、照明は華やかな夜の賑わいを連続させる、ネオンをつけるなど、こういうこともローカルルールになるとできるようになるということです。

■「歴史まちづくり法」と「歴史的風致」

さらに時代は進みまして、もっと今の資源を大切にしようというのが、我々が参加している「歴史まちづくり法」。さっき言った文化財、例えば城や、お寺、宿場町だとか、そういう重要なポイントに指定をして、それは大切だから守りましょうという仕組みなんですけれども、城下町だったら当然武家屋敷があります。寺があれば門前町もあります。そういうところにも歴史的な資産が残されているから、これをどうにかして守ろうじゃないか、国土交通省と文部科学省と一緒になってこういう法律を作りました。この時に作ったのは有形の建造物で町ができていますが、その建造物を残すためには今でも使ってないといけない。活動をするという無形の概念。地域の人々の活動を含めた、この両

方を含む環境を「歴史的風致」という名前をつけました。これは重要なので、これで歴史的文化財を含む街並みを守ろうではないかというような発想で歴史まちづくり法を作って今年でちょうど10年。近場では多賀城を指定しています。

この時にもう一つだけ議論をしている話がありますのは、例えば形、弘前城だけではなく桜まつりや、伏見の酒蔵だけではなく、お酒を飲む人がいて初めて残る街並みを大切にしていこうという事ですが、もう一つ議論になったのはオーセンティシティーという文化財の比較的強い考え方です。要は本物であるかどうか。世界中、世界遺産の審査基準で1番大きなものは本物であるかどうか。オーセンティシティーをちゃんと有しているか。日本の場合は木と紙ベースだから、割にそんな長持ちしないんですが、そこを様式としてうまく持っているか、そういうオーセンティシティー。某県のお城。コンクリートでできています。様式はほぼ当時のままなんですが、ただ文化財的にはこれは許されません。こういうものはどうやって大事にしていくか、というのは我々の課題。例えばそこでどうやってやるか、大事なものは公園として買ったり、お金を入れて守ったり、1番安い守り方はですね、褒めて乗っけるということで、都市景観大賞。

その頃ってみんなお金なかったから、要は良いものは褒めましょう。悪いものはけなしましょう、というのが1番なんです。今日は褒める集いなので褒めます。

■仙台の景観について

仙台の街、よそ者から見たらとっても魅力でやっぱりこの眺めなんです。都市計画の時に全国的に大都市で50メートル、中小都市で36メーター以上の都市計画的な概念で言うとパークウェイ、ブールバール、いわゆるシャンゼリゼのような道、これを都市の骨格としようじゃないかと言ってできたのが、青葉通であり、定禅寺通です。

これも実は新幹線のホームで降りるとこの青葉通の眺めが出てきて、外から来た人はちょっとびっくりします。中の人はそうなの？という感じです。本当に驚きます。同じように広島も戦災、原爆でやられましたけども、同じようにここに100メートルの幅ですよ。今でもお祭りのときにはちょっと仙台を彷彿とさせるような感じ。これは今の資産として残っています。

僕の今いる大学の所、泉パークタウン。日本一の道路。緑の端から端まで120メートルあります。これ日本のどこにもこの眺めはありません。だから今でも泉パークタウン、交通は不便です、通うのも大変ですが値段が下がりません。これは実は不動産価値に緑だとか景観が反映されている如実な例なんですけども、そこはなかなか難しいところです。

■市民と景観のつながり

今までは景観のハードの話をしてきました。

今度はハードではなく、後の講演の先生が話されると思いますが、ちゃんとオープンスペース計画というのはパンフレットの1番上に出てきている。これはやっぱりすごいなと思った。

価値をどうやって生み出すかという事の優先順位、大体機能から入るんですけども、今度は心の話です。宮城大学に来てさっきの「歴史まちづくり法」というものをやっていたんですが、それをやってる市長さん達にあちこちでインタビューをして周りました。この中でいくつかポイントを紹介いたします。

青森県の弘前。お祭りっていうのは大切だ。子供たちがどこに就職しようが出ていったって必ず自分の街には帰って来る。祭りに参加するのは、要は必ずねぷたに参加した親御さんは自分の子供たちをもう一回参加させたいと思って帰ってくる、その体験があれば東京で仕事を辞めたら戻ってくるのです。こういうようなことにつながるんじゃないか、という話をされています。

続いて、福島県の白河。震災の時に内陸ですけどもかなり蔵が壊れました。蔵は個人の持ち物だから壊されても仕方がないんですけれども、街の資産だということで白河市長が凄いのは東日本大震災が起きて、3月が終わるかどうかの時に市の職員1人と、蔵の持ち主全員を訪ねて、お願いとして蔵を残して欲しいと言って回った。そういうことをしないと絶対壊されると思って動いた、ということで、そんな形で蔵の修理を進めていました。

大館市　矢立小学校の生徒が五稜郭でパンフを渡し説明している様子

1番お伝えしたかったのは大館。秋田県の1番北側です。そこで市長さんとお話しした時ですね。「小さい時に大館に歴史的なものがあるとか受け継いで行かなきゃいけないものがあるとか何も教えてくれなかった。だから人から聞かれると大館には何もないよ、と答えるしかできなかった。」ところが、新しい市長さんが色々と市の中でイベントをして歴史街づくり探訪に、子供たちを参加させると、修学旅行で函館に行って五稜郭で大館のパンフレットを配っている、というようなことを平気でやるようになった。そういうような心の問題を言われておられました。

だから形というのは、緑だとか景観だとか言うものが実際に市場では取引されない価値がないものなんだけれどもそれがあるから高く売れる土地もあれば、仙台って言う街がもっているポテンシャルで仙台に必ず見に行こうとその人は思うわけです。他所の人が見に来て仙台の街を褒めると褒められた街の人たちは当然のことながらうれしくて良い街に住んでいると思う。それをぐるぐると繰り返すということが1番大切なんだ、と思います。

都市景観大賞、この仙台が持っている誇りをどうやって未来の人たちに伝えるか、ということが1番重要なので今日は特に市民の方がたくさんいらっしゃるということなので、その心の問題をいかに形にしていくか。途中でも言いましたけれども、青葉通の緑を見て、外から来た人たちが驚く、ということと同じで、さっきの定禅寺通、僕は日本中いろんなところに行ってますけど、あれほどきれいな街の通りを、あれほどきれいに活用してる事例は日本中どこにもありません。それをもっともっと堂々と威張って、誇りを持って欲しい。そんな上でどんな道路でも仙台ほど街路樹がきれいに整備されている街はありません。ただ残念ながら歴史的な資産はあまり大切にしてないのでは、というのが正直なところで、この片平キャンパスに残されていて、これを評価するというのは良いことだと思っています。

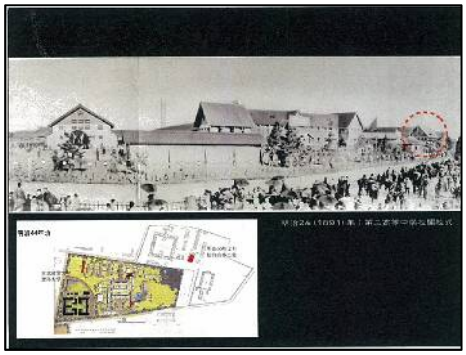
【第２部】基調講演②

「片平キャンパスの110年とこれから」

東北大学特任教授
東北大学キャンパスデザイン室副室長
杉山　丞　氏

私の講演では基本的に片平キャンパスが110年、実際は旧制二高も合わせると126年ですが、どう変わってきたか、特にここ数年移転問題もあり、危機が二回ほどあったんですが、そういった危機はどういう乗り越えてきたか、ということをかいつまんで紹介したいと思います。

■片平キャンパスの歴史



これは片平キャンパスの最も古い写真ですが、旧制二高の開校の写真です。ここに丸がありますけれども、この右端の建物が１つ場所は移っておりますけれど、現在も残っております。次に旧制二高の後に仙台医学専門学校がこちらのキャンパスの中にできてまいりまして、魯迅が学んだ教室ですとか、大講義棟等が残っております。明治37年の建物でございます。もう一つ、明治の旧制二高の図書館の書庫、レンガ造りの建物ですが、これも残っております。ここまでは旧制二高、あるいは医学専門学校の建物になります。

大正12年に作られた東北帝国大学の建物、これは現在も残っております。これは仙台では最も古いコンクリート造と言われています。コンクリートの建物にレンガを表に貼っていると思われますが、現在は放送大学として使われております。同じく大正ですが北門を入りましてすぐの建物、これもコンクリート造、恐らく仙台で2番目に古い建物として作られております。当初は漆喰とレンガがむき出しだったのですが、これにスクラッチタイルが数年後に貼られて、現在の姿となっております。大正14年、東北帝国大学の図書館の閲覧室と書庫ができてまいります。この閲覧室は現在資料館として現役で展示室として使われております。大正14年では、もう一つ旧法文学部の建物が1つ残されております。昭和になりまして、昭和5年ですが、これはコンクリートですけれども、工学部の機械電気工学の教室が建てられて現在残っております。同じく昭和5年、これはSKK仙台高等工業の建物ですが、これは建築学館が入っていた建物ですが、これも現在残っております。昭和5年の空撮の写真ですが、この中のかなりの建物が現在も残っております。昭和9年、現在本部で使われておりますが、医学部科学教室が建てられております。この時にですね、片平の正門からまっすぐ入りまして、右手に資料館があり、左手にこの建物ができるのですが、この大通りが整備されました。いろいろ調べますと、片平キャンパスで唯一マスタープラン的な構想のもとに作られた時期になります。昭和16年、本田記念館という金属材料研究所の建物があります。ここまでが戦前に作られた建物の現在残っているものの紹介になります。

これは戦後、昭和32年の片平に理学工学部が密に入っていた時代の配置図になっています。写真を見るとわかりますけれども、当時は周辺は平家、あるいは2階建ての中に、東北大学だけが割りと

ビル的な高層、中層の建物で構成されているのが分かります。昭和40年から工学部理学部が青葉山に移転をしまして、工学部が移転を終わったあとの配置図になります。×が書いてあるのがいくつか見えますが、工学部が移転したことによって、いらなくなったということで建物を解体している事の案内図になっております。

■片平キャンパスの危機

東北大片平キャンパス「産業遺産」に認定
移転計画に保存の勧め
明治・大正・昭和初期の洋風建築群
板挟み 大学当惑

ここから1つの危機なんですが、片平から工学部理学部が青葉山に移りまして、文系法学部文学部が川内に移り、片平がだいぶ建物が様変わりしてきまして、そこに研究所群が入ってまいりました。そうして研究所が集まってくる中で片平を再開発しようという構想が持ち上がります。昭和63年にまとまっていますが、この時の構想としましては、北門入ってすぐのところに、まず壊して作り変えるとか近代建築はほとんど解体をして、これが完成予想図ですが、北門から入ってきて今あるのものは壊して、ビルディングに立て替えていこう、という再開発計画が昭和63年に持ち上がります。これに予算がついてきます。最初の予算で建てられたものが金研の2号館でした。平成4年に予算化されて7階建てのビルが立って、この辺が壊されていきます。第2弾としてこの建物に予算がつきまして、この予算のために建物をいくつか壊しているのですが、間一髪のタイミングですが、東北大学片平キャンパスと雨宮キャンパスについては売却をして、青葉山新キャンパスに移転する方向で今後検討する、ということが平成6年に決まりました。これで、片平での再開発はすべて中止になりました。

東北大学の移転が決定して、再開発が凍結になったのはいいのですが、移転した後、売却したらどうなるかという事で、様々な議論が巻き起こります。片平たてもの應援團が結成して4年後でしょうか。平成14年の時に産業遺産に應援團の方が推薦をされて、片平キャンパスが登録されました。平成14年5月2日ですが、片平キャンパスの全面移転の予定だったのですが、3分の1を売却せず保存しようと動きに変わります。その理由が新聞にいくつか載っていますが、古い建築物の保存を求める市民の声や、移転による中心市街地の空洞化を懸念する声があったと、こういったことがあり、3分の1を残すということが決定されます。これが第2の危機なのですが、この時に当時のキャンパス計画室が中心となりまして学外の方、仙台市の景観室の細田さん、片平たてもの應援團の櫻井さん、JIAの渋谷さんといった外部の委員の方に参加いただいて、内部からは建築士の井口先生、100年資料編纂室の今井先生に入って頂き、私たちキャンパス計画室が事務局となり、何回か議論をして、歴史的建造物保存再生利用検討ワーキングという名で、検討した結果を評議会にあげまして、平成14年10月に大学評議会にこの案を承認頂きました。

先程の保存の方針に基づいて作られたものが１つは本部棟ですね。理科学教室を改修しまして、本部にしたもの。あとは本部2号館、さくらホールの新築といったものが、このすぐ後に行われまして、その時のトラストファンドの方から本部2号館の照明の寄贈などを受け、平成20年にはトラストファンドで寄付された基金から370万を寄付いただくといったことが行われ、そうした市民の方の協力を得ながら整備をしてきたことが評価されて、仙台市の都市景観大賞というものを平成16年に頂きます。

■片平キャンパスマスタープランの作成～改修

そのあと、平成19年に片平のマスタープランを作成します。基本的には先程の平成14年に作りました、近代建築を残していくリストを中心にして作られたものになっております。オープンスペース。中央の桜の部分と北門から入ってくるこの中央の道のエリア、後は正門に至る軸というものをスペースの骨格として位置づけて整備を図ってきました。建物のマスタープランですが、外壁だけでも保存するとか、正門からの軸とか入っております。

もう一つは駐車場の計画。これがマスタープランで非常に重要なのですが、キャンパスの中から車を少しでも減らして、中央部分から車の動線を外周に回していこうということをマスタープランでは決めて動いてきております。保存方針、マスタープランに基づく整備、保存改修という形になります。いくつか手法がありますが、これはそのまま先程の物ですけれども、外観をスチールサッシをアルミサッシに変えたりしてますが、基本的には外観をそのまま残して改修した事例です。

同じくですが、素材研の建物もスチールサッシをアルミサッシに変えるなどの最小限の変更で外観については、リニューアルして、中はこういった形で照明器具を少し雰囲気を変え、演出をしたりしていますけれども、柱とか柱頭については、オリジナルのものを使っています。あとは資料館につきましても、外観を変えることなく、この中にガラスの内側に壁を足したりしまして、外観には影響ない形で耐震補強をして、改修しています。

エクステンション教育研究棟につきましてもアルミサッシ、シルバーだったものを黒いアルミサッシに変えたり、剥がれ落ちそうなタイルを張り変えるといった形で、オリジナルをそのまま生かした形で改修しています。本田記念館はほぼそのままです。魯迅が学んだ教室につきましても、外壁塗装だけであまり手をかけないようにしています。こちらは北門入ってすぐの建物ですが、老朽化が激しくて構造的にもほとんどもたない、改築せざるをえない、という状況でしたが、外壁だけでも何とか残したいということで、外壁1枚残しまして、中を壊して建て替える、こういう形で中に新しい建物を建てています。

この1枚が外壁保存の部分でして、1つのフレームに組んだコンクリートの塊で、これを押さえる形になります。別の構造で中庭に立てた研究棟ですが、結果的には最先端の研究施設に生まれ変わることができました。

■新築時のデザインコード

次がデザインコードに基づく新築で、今までは古いものを保存改修ということでした。1つ目はこの建物です。本部棟を桜の木を挟んだ向かい側にホールを建てる計画が持ち上がりました。本部棟でデザインの特徴を生かして新築しよう。ということで、このスクラッチタイル、凹凸の味のあるタイルを用いた形で約1m幅の連続する壁柱、これが本部棟のデザインの特徴です。これを新築する場合の1つのルールとして、これを使った形でこのさくらホールの約1mのスクラッチタイルで貼られた連続する壁柱を初めて採用しました。

次に正門からまっすぐ見たところに古い本部棟があったんですが、この本部棟の奥に、平成元年にSS30が出来上がりまして、これ以降本部の写真を見ると、皆さん「東北大学は立派な事務棟があり

ますね」ということをおっしゃられる方がいて、なんとかこの景観を改善できないか、ということで、いろいろ検討しまして、ここにちょっとタワー上の建物を作れば隠れるかってことで、本部棟の周辺から見る分においてはSS30が隠れて落ち着いたキャンパスになるんではないか、と見事にシュミレーション通りに出来上がったんですが、今度は隣に森ビルが出来上がりました。中には展示ギャラリーなどがつくられております。あとは同じように新築の時には、スクラッチタイル。これは幅が細いですけども連続する壁柱でデザインしたものができてきています。

もう一つはプレハブの食堂が北門食堂という建物だったのですが、建て替えの時に街に、一番町の通りに対して賑わいを出すような感じで、ぐっと道に寄せまして、ガラス張りで中が見えるような食堂にしました。こうした部分的に連続性をとりながら賑わいのあるデザインにしています

夜は街に対する行灯のような形で光を漏らしています。これはその通りに大日会という周辺の町内会の方が寄贈された街灯。仙台市で植えられたユリノキの並木と一体になった写真になっています。

今回こういった形で仙台市と東北大が共同で応募した形で、都市景観賞を頂いた形になっています。中は1階に学生食堂、2階にレストランが入っています。

もう一つは改修です。新築じゃなくて改修の場合の話なのですが、改修するときに茶色い色で塗るとともに、スクラッチタイルで壁柱的なものを付加する、ということで、新築あるいは歴史的建造物との調和を図る形での改修をしています。これが基本形、基本的には付け柱と茶色く塗るということが改修の上での基本形です。

■オープンスペースの改善

もう一つオープンスペースの改善ということで、建物だけでは、なかなか景観は良くならない。１つは北門周辺、こういった塀がぐるっとめぐっていて、非常に入りにくいところを壁を壊して、これは実現するのに7～8年ぐらいかかりましたけど、街と地続きにあるような形でのオープン化を図っています。

あとは駐車場を減らすために有料化をしまして、月1,000円ですけれども年間12,000円取ることによって約2割、駐車台数が減りました。これを見ても本部の目の前にずらっと並んでいるのが、現在は無くなっております。駐車台数が減ったことによって景観の向上、あとは道もアスファルトでなく浸透性の茶色っぽい舗装にすることによって、歩行者優先のキャンパスを何とか確保しようとしています。あとはサインの統一、ベンチを置いたり、街灯を統一したり、オープンスペースのデザインの統一を図っております。こうしたことで、この度、都市景観大賞の特別賞をいただきました。

■片平キャンパスのこれから

もう一つの現在として、昨日、10月27日に登録有形文化財に5件が登録されております。これからについては、平成27年に作成したマスタープランがありまして、この中で七軒丁通りの改善といいますか、少しあげられております。七軒丁南門周辺に新棟を作る計画がありまして、それに併せて、外構をできるところまでやっていきたい。まだ先になりますけれども、今は見苦しいネットフェンスの境界、この辺をなんとか改善していきたいというのが、全く未定ですけれども計画としてございます。あとはこの中央の公園つきましても現在なかなか使いづらい公園なんですが、もう少しオープン

にしてもう少し憩える公園にしたいということがあります。

最後に、今回登録有形文化財に登録したもの以外に残っている近代建築についても第2弾として登録する準備を進めています。こうしたことが実現していきますと、一度目の危機は大学の都合で乗り越えて、二度目の危機は大学外部の方の声に助けられて、何とか残ってきた片平キャンパスでありますが、登録有形文化財となるので少しは安心ですけども、今後も色々な危機が待ってると思いますので、市民の方も市民共有の宝を見守っていただきたいということで基調講演②については以上となります。

【第２部】トークセッション

「歴史的建物と緑が紡ぐ片平の過去・現在・未来」

【コーディネーター】
　舟引　敏明氏（宮城大学事業構想学郡　教授　大館市歴史的風致維持向上協議会委員）
【パネリスト】
　杉山　丞　氏（東北大学特任教授　東北大学キャンパスデザイン室副室長）
　今野　均　氏（片平地区連合町内会会長・花壇大手町町内会会長））
　櫻井　久美氏（元片平たてもの應援團・元片平キャンパス近代建築トラストファンド代表）

○舟引　本日のトークセッションのテーマは「歴史的建物と緑が紡ぐ片平の過去・現在・未来」です。
　先ほど杉山先生からの話でもかなり重要な役割を担っていた「片平たてもの應援團」、それから「片平キャンパス近代建築トラストファンド」の代表を務められました櫻井さんから、まず当時の活動の状況や思いなどを自己紹介も含め、お話しいただきたいと思います。

○櫻井　片平キャンパスの保存活動の市民活動から離れて10年ぐらいになりますので、今回このお話を頂いたとき「私ですか」という感じで、非常にびっくりしましたし、緊張しました。でも節目としまして、都市景観大賞「特別賞」を片平キャンパスが受賞した。登録文化財にもなったということで、非常におめでたいことだと思っております。
　私の始めた市民活動のきっかけは「本当に好き」、それだけです。それが基本にありまして、いろいろ調べてみれば片平キャンパスが歴史的にも文化的にも貴重な場所であるというのは、調べて後からわかったことで後付けの理由として、周りの方を説得するためにこういう貴重な場所なんだよ、素晴らしい場所なんだよと、いろいろ言っていましたけども、もう20年前の話ということで、だいぶ昔の話なので記憶が曖昧なところもありますが、そういう形で活動を始めたというわけです。

○舟引　次に地元にお住まいの今野さんより、地域として片平キャンパスってどんな場所だったのかということを自己紹介も含めて、お話しいただきたいと思います。

○今野　ご紹介いただきました、今野です。私、現在75歳です。町内会とかそういうのは60歳、定年になってから始めました。とりあえず、第二の人生を楽しもう、ということでゴルフ三昧の生活をしよう、と考えていましたが、そんな時に遊んでるならば、ということで地域の役員をやってくれませんか？と誘いにこられたんですね。私は生まれもここで、これから終わりの住処もこちらということで、少しはお手伝いしようということで始めたんです。
　3期目から会長になって12年。そのくらい経つわけですけれども、その間にまずはその花壇大手町でいろいろやってきたのですが、会長になると連合町内会の役員もやらなくてはいけなくて、そこで片平地区連合町会町内会もやってたんですけど、そこでも問題がいろいろ見えてきて、それを解決するために地域を知ることからやろうということで「平成風土記」を作る。そういうことをやったんで

す。「平成風土記」を作って、1つ気運が盛り上がったところでまちづくりをやろうということで取り組んで参りました。
　だからあまり私がここにいるのは、居づらいのですが、景観の事はよく分かりません。分からないけれどいろいろなことで取り組んできたことの話しをさせていただいて、少しの時間ですが参考にして頂ければと思います。

○舟引　ありがとうございました。先ほど、杉山先生から自己紹介をあまりお伺いしておりませんでしたので、改めまして自己紹介とどうしてこういう事に関わることになったのか、その辺りを少しお聞かせいただけませんでしょうか。

○杉山　私は、東北大学建築科を卒業したのですが、東京の設計事務所で十数年ぐらい働いていました。その時に先程もご紹介しましたが片平の土地を売却して新キャンパスを青葉山に作る、という話が持ち上がってきたときに、そういった計画ができる人間いないかということで、20年前に古巣に戻って参りまして、当初は新キャンパスのために、緑豊かな所にどういう風なキャンパスをつくれば影響の少ない、あるいは市民の方から親しまれるキャンパスになるかというキャンパス計画づくりと、移転した後の片平キャンパスをどうしたら良いか、という話がメインでしたけども、大学全体の川内だとか星稜だとかのキャンパス計画をする形になって、元々は新キャンパスと片平キャンパスを中心にかれこれ20年となります。もうずいぶん長くなりましたけども、ちょうど片平たてもの應援團を結成する1年前位に戻ってきた形になります。

○舟引　ありがとうございます。こういうプロジェクトというのは、タイミングだとかも大切ですし、その時にちゃんとした人がそれに当たることができるか、これはほんとに偶然以外の何物でもないんですけれども、本当に良い人が良いタイミングでその場所にいて頂けたんだなと、だから今こういう人たちで「あー良かった」と言える時代に生きているんではないか、というのはよそ者の私の感想でございます。
　次はご用意いただいたコンテンツをご紹介いただきたいと思います。順番は今お話を頂いた櫻井さんから先にお願い致します。

○櫻井　もうすでに景観に関する市民活動などから離れてだいぶ経ちまして、片平キャンパスの保存活動を、景観に関するいろんなことをフィールドワークを始める時はですね、私は子育ても忙しいし、なんでこんなことに首突っ込んじゃったんだ、と自分が好きで始めたんだけどもなんでこんな大変なことをやり始めちゃったんだろう、ということに始めた後で気が付きました。今思うと、とにかく忙しくて、訳がわからなかった状態です。そんな感じでやっていた覚えがあります。
　その時の長女は今年の春に20歳になりました。今もう全く私は市民活動には関わっておりませんので、この辺の近所に住んでる一市民として、良い景観というか自分が好ましい景観、それから「これはないよね」というようなものをランダムにいくつか街の中から拾ってきましたので、実際の写真を見ながら、お話ししていければと思います。

ここは駅からすぐの所なんですけれども、駅の真ん前の通りを五橋のほうにちょっと歩いていくと、普通のビルです。ビルの1階のところが五橋横丁という、このような暖簾に統一性を持たせた飲食店がずらっと入っております。これは夕暮れ時なんか提灯に灯りが灯ったりすると、思わずふらふらと入って行きたくなるような、そういう魅力的な建物の作りをしているんじゃないかと思っております。

これはメディアテークのすぐ隣にあります、杜門道さんというギャラリーの入り口のところです。非常に素敵な工芸品を多く扱っているお店でありまして、私はいつも床のフローリングの古びた感じが非常にいいなと思って見ておりますが、この間、お店の方に言われたのは、天井が良いと天井の写真を撮っていく方が結構いらっしゃいますと。コンクリート打ちっ放しで、そこが前はちゃんと壁紙が貼ってあって、天井の板が貼ってあったりしたのを、全て剥がして元々のコンクリートの打ちっ放しとなっています。コンクリートを打つときの木の木目の跡が、天井にはっきりと出ていまして、それがなかなかの風情があって素晴らしい感じがしました。

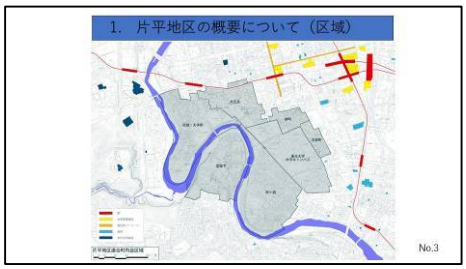
メディアテークという素晴らしい建物ができたことによって、これは隣にできた建物もそこを意識しながら雰囲気を壊さないように、雰囲気をもっと盛り上げるようにと意識して作られたんだろうなと見ております。古い建物ですけれども、うまい具合に新しい所と古い感じを生かしてより景観を盛り上げているんだなと思います。

これから個人的に好ましくない方に移らさせて頂きたいと思うんですが、これは晩翠通。高等裁判所の近くなんですけれども、歩道の写真です。この赤い色ちょっときつすぎませんかね、と思うんですよ。ここの色の選び方はちょっと嫌だな、と思って写真を撮りました。それと、片平キャンパスの正門の斜め向かい、片平市民センターの前の所なんですけど、実はここ昔ですね、通学路だったんです。歩道の幅をつい1～ 2年前に広げたんですね。非常に歩きやすくなって、ベンチなんかもできましていいんですが、この歩道の色って何ですかね。私はこれが気になるんです。

良いところ、悪いところ、ランダムで写真撮ってこちら皆様にお見せしておりますけれども、ここは愛宕神社の下のところですけれども、コンクリートの擁壁になっています。急カーブスピード落とせ100年の杜づくりとどーんと書いてあります。今日ここに座る前にパネリストの皆様と前もって打ち合わせをしたんですけども、皆さん口を揃えて「これひどいよね」言ってました。

良い景観をどういう風に守っていくか、育てていくか。今、SNSの時代ですので、こういうのを写真に撮って「これって良くないよね」「これって何なの？」ということをちょっとつぶやいて投げかけてみるといいんじゃないかなと思ったりしております。

○舟引　ありがとうございました。市民から発信するという意味でございますけども、片平のまちづくりの会がどういうふうに関わってきたか、ということを今野さんよりお話しいただきたいと思います。



○今野　私としては地域のまちづくりのことをやろうということなんですけども、今日は特に東北大学との関係、関りについてお話していきたいと思います。

実は片平地区というのは、この地図の色が少しグレーになっているところなんですけれど、広瀬川沿いに花壇・大手町、右上の方に片平丁・北目町・柳町とあって、東北大学片平キャンパスが半分くらい入ってきているのですね。こういう状況にあるのが、私どもの片平連合町内会という地区です。

ですので、東北大学とは随分関わりがあるんだなと思っていたわけですけども、実は東日本大震災があるまでほとんど何の関りももっておりませんでした。あの時に色々問題があってですね、やってきたよということだったんです。

今は、特に先程の東北大学との兼ね合いということで、東日本大震災以前はほとんど何もなかったよという事なんですが、実は先に「東北大学グラウンドの砂埃対策」があったんです。14年位前なんですが、砂埃がいっぱい出て近所の人が非常に迷惑していた。実際に東北大学の方々と話して最終的には人工芝にしてくれ、という話をしたんですが、費用の問題があってダメだったんですが、最終的にスプリンクラーをつけ、その鍵を我々が預かって、いつ使用してもいいということでやってもらったんですね。

もう一つ、我々の取り組みの中で防災ロードマップという事だったのですが、防災のところで問題が起きたのは避難所運営だったんです。実際に片平丁小学校は指定避難所になっていたんですけど、東日本大震災が起きたとき約3,000人ぐらいが来たんですよ。教室開放しても入りきりませんでした。次の小学校へ行ってもらうように手続きしたわけですけども、元々指定避難所というのは地域の人たちが集まる場所だとしか認識してなかったです。そこにJR仙台駅から来た帰宅困難者だとか、後は街で働いてる人が帰れなくなったとかで、そういう人もいた。東北大学の片平キャンパスもクローズしたんですね。そして学生さんたちがいる場所がなくなっていっぱい来ました。その中には留学生なんかもいっぱいいたわけですけども、そういった人の対応ということでいろいろトラブルになって、大学さんともいろいろ話をするようになったんですけど、最終的には今は協力しながらやるということで関係は良くなっています。

東北大学との関係という事で、「かたひらまちあるきマップ」というものを作ったわけですけども、この時には多大なる協力をいただきながら作成しました。マップには6コース掲載されていますが、今日の午前中もこれのまちあるきをやってきたんですね。月に1回位はガイドをしながら、まちあるきをやっているということで、それなりに一生懸命、防災だけでなく、こういう面でも一緒にやれるようになってきた、ということで非常に関係が良くなってきたかな、ということです。実は大学の中もですね、今日みんなで歩いてましたけども非常にフレンドリーになったというか、オープンになったというかその実感が非常にあります。そういう中で今後どうするかって話も後でしたいと思いますけども、非常に関係は良くなってきたなと実感しているところでございます。

○舟引　どうもありがとうございました。地元が好きな人で地元に熱い思いを持っている人に、地元のことを喋らせたら終わらないです。ただそのほうが面白いんですけどね。杉山先生、今のお二方のお話を聞いて含めていかがでしょうか。きれいな写真たくさんご用意していただいてるんですけども。

○杉山　私は櫻井さんにぜひお聞きしたかったことがありまして、たてもの應援團、最初に作られた時の宣言文、先ほど紹介した以外のところで「歴史ある建物は市民の宝」「片平キャンパスはみんな財産」というのが最初の宣言文にあって非常にわかりやすい宣言文だと思ったんですが、そういう思いで立ち上げた應援團の活動、何年間も中を見てこられて、当初こうなったらいいなと思った片平の未来の姿と現在の姿を重ねた時に、これはちょっと違うんじゃないか、あるいは思ったより良くなったとか、應援團の視点から見て、どんな感想をお持ちなのか、ぜひお聞かせ頂ければと思います。

○櫻井　全く素人で、私何も専門的な勉強していないので好きか嫌いかでしか評価してこなかったから、「古い建物いいじゃん」みたいなそういうノリでやってきたもので、これだけ開かれたキャンパス、市民も入りやすくて寛ぎも与えてくれる、この憩いの場というのは、主要なものは古い建物を残して頂いてますし、点数としては百点以上だと思います。

○杉山　実は以前、河北新報に片平キャンパスの大木、松並木、ヒマラヤ杉が伐採されたことを嘆く投稿されたことがありまして、結構失われたと嘆くようなことを書かれたことがあったと思うんですが、建物ではなく緑の景観についてどう思われているか、ということと、昨今広瀬通とかで銀杏並木が伐採されたりなんてことも含めて、仙台市全体の中で片平も含めて緑の扱いがどうなってるか当時の思いどんな風にあったのか、お聞かせ頂ければと思います。

○櫻井　確かに大きな木が切られるのは、もったいないですし悲しいです。ただやっぱり木というのは、どんどん伸びていくと老朽化して、枝が折れたりとか、幹に空洞ができたりとか安全面のこと、台風が来て大木が倒れたりということもありますので、まずまず緑は大事にしてるし、きれいになっているし、片平キャンパスは杉山先生も内部にいらっしゃいますのでかなり安心しています。
これからも頑張って頂けると嬉しいなと思っています。

○杉山　それは、ちょっと安心しすぎですね。あの緑についてはなかなか厳しいものがあります。登録文化財なので建物を壊すという事はまずないと思うのですが、今後のその近代建築を残しつつ、残った土地の中に建物を作るときに「この木を切ったほうがいいんじゃないか」という話も出ないとは限りませんので、ぜひ周りの方々、町内会の方も含めてですね、東北大学が大きな木を切らないよう注視して頂ければと思います。

○舟引　杉山先生のご用意いただいた写真について、ご紹介いただけますでしょうか。

○杉山　片平キャンパスから仙台市全体の話、大風呂敷を広げた話を最後にさせていただければと思います。先ほど舟引先生からもありましたけど、仙台の魅力というのはやはり個性としての緑豊かな都市空間というのが真っ先にあります。見事なケヤキ並木を持つ定禅寺通と青葉通となってくるわけなんです。片平キャンパスが割りと青葉通から近い、そこから90度曲がって正門抜けていきますと、広瀬川もかなり近い場所になります。先ほど紹介がありましたけども「片平地区まちづくり会」「市民センター」「東北大学」共同で「まちあるきマップ」を作って頂きまして、片平キャンパスから様々なまちあるきへの展開が、そのマップを片手に歩いて頂くと図れる、というような形になりつつあります。

右下に片平キャンパス、左の真ん中に青葉山がありますけれども、この形で広瀬川を挟んで3つのキャンパスが一体化しています。特に川内キャンパス植物園、青葉山新キャンパスはほぼひとつながりのキャンパスとなっておりまして、植物園で様々なルートがありますけどもタイムスリップをして、散策をすると、いつの間にか青葉山キャンパスに到達する。

青葉山キャンパスにつきましては、ケヤキ並木が樹齢50年。定禅寺よりはちょっと若いですけれども、それなりの年齢を経て立派なケヤキになりました。この青葉山まで来ますと、そこから青葉の森経由で三居沢から降りて行くこともできますし、今、青葉山・八木山フットパスの会というところが、竜ノ口渓谷を渡って、八木山に至るフットパスというのをさまざま開発しているところです。今、片平キャンパスから広瀬川を通って川内キャンパスから青葉山に行って、さらに八木山まで行くというルートがなかなか楽しげな散策ルートにできるんじゃないか、という話になっています。

最後に他の街の事例ですけども、ボストンという街は、この辺りが旧市街地で、ここにちょっと大きな公園がありまして、緑の道を通っていくと先に自然の緑地があり、ここに美術館があったり散策路があったりという中でぐるっと回って動物園がある。こういったグリーンネックレスみたいなものが街を囲んでいる都市なんですが、歩いて回れる緑の公園のネットワークの都市に近づいていくんじゃないかと思っています。もう一つはシンガポールですけども、ガーデンシティと呼ばれてますが、非常に立派な並木で空港に降り立ったら、このような道で迎えられます。最近海岸線を開発して、新しい無料の植物園ができたり、ビルを作る時も非常に緑豊かなビルを作る形で、いろんな作り方において、戦略としてシンガポールは観光資源がない中で、緑の豊かな街というのが観光資源になったり、企業誘致につながるという事では、本腰を入れて、国を挙げて戦略としてガーデンシティをやっています。こういったことが仙台市においても本腰を入れてですね、大きなビジョンネットワークみたいなものが今後つながっていければということで紹介しました。

○舟引　ありがとうございました。お三方の熱い思いが伝わったんではないかと思います。
私から問題提起をしたいと思います。ちゃんと良いものは褒める、悪いものは悪い、というのは大切で、それを積み重ねていくということと、もう一つ、今日は先輩方もいらっしゃれば、若い方もいらっしゃるけども、若い人に良いものは良い、ちゃんと伝えていかないといけない。そういうことを

していくことが大切だと思います。3年程前に県庁で会議があり、お昼ご飯になりまして、あるお店に連れていかれてですね。二階に木の階段上って畳の部屋でラーメン食べて、県庁のすぐそばにこんな面白い、良いとこだよね、と思った記憶を最後にお伝えして終わらせて頂きたいと思います。皆さんどうもご協力ありがとうございました。